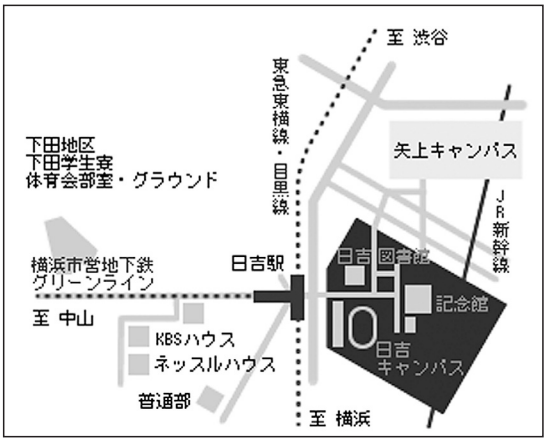
日本英文学会関東支部
第5回大会プログラム

日時：2011年11月5日（土）

会場：慶應義塾大学（日吉キャンパス第4校舎A棟、B棟）

〒223-8521 神奈川県横浜市港北区日吉4-1-1



■交通アクセス

・東急東横線、東急目黒線

・横浜市営地下鉄グリーンライン

日吉駅下車、徒歩1分

※東急東横線の特急は日吉駅に停車しません。

※渋谷～日吉：25分（急行約20分）

※横浜～日吉：20分（急行約15分）

※新横浜～菊名～日吉：20分

日本英文学会関東支部事務局

〒162-0825 東京都新宿区神楽坂1−2

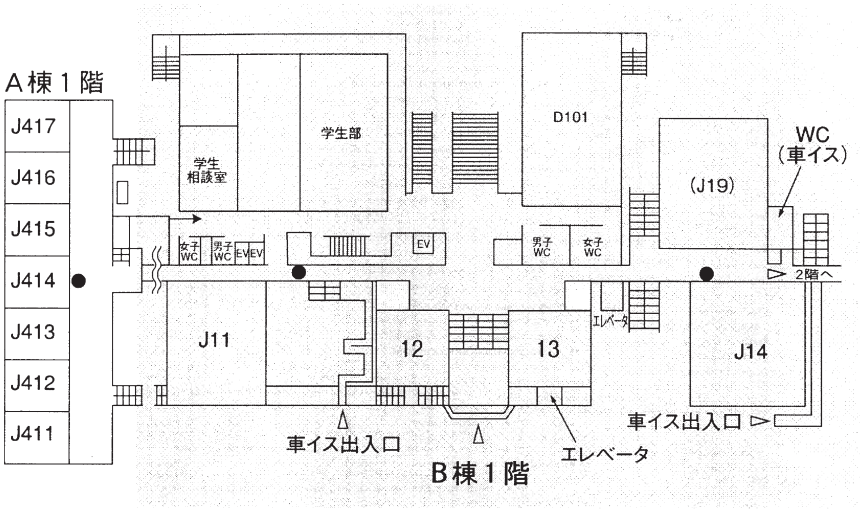
研究社英語センタービル

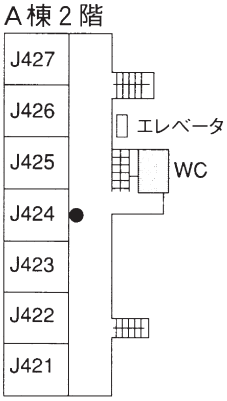
Tel/Fax 03−5291−1922

E-mail: kanto@elsj.org

共催：慶應英文学会

【第４校舎】





懇親会（18：45 − 20：45）

会場：慶應義塾日吉ファカルティラウンジ（TEL：045-562-7882）

会費：4,000円（学生2,000円）

事前申込は不要です。奮ってご参加ください。

開場・受付開始（12：00より　第4校舎B棟J12番教室前にて）

シンポジウム（12：30－15：00）

英米文学部門シンポジウム（B棟J12番教室）

「冷戦期ナショナリズムの諸相」

（司会、講師）　青山学院大学教授　折島正司
（講師）　日本女子大学学術研究員　鈴木英明
（講師）　東洋大学専任講師　近藤康裕
（ディスカッサント）　東京学芸大学教授　大田信良

研究発表（15：15－16：15）

第1室（A棟J421番教室）　（司会）　東京大学教授　寺澤盾

中英語ロマンスと年代記に映し出されるデーン人の表象

立教大学大学院　岡本広毅

第2室（A棟J422番教室）　（司会）　慶應義塾大学准教授　大串尚代

言い直して、その先へ ――E・A・ポー「黒猫」(1843) におけるカテゴリー形成――

中央大学非常勤講師　須藤彩子

第3室（A棟J423番教室）　（司会）　早稲田大学准教授　石原剛

エドワード朝期における少年冒険小説の（不）可能性――『ピーター・パン』と自由帝国主義――

一橋大学大学院　高田英和

第4室（A棟J424番教室）　（司会）　東京大学准教授　田尻芳樹

〝帝国〟と〝老い〟――J. M. クッツェーの *Waiting for the Barbarians*――

早稲田大学大学院　川村由美

支部総会（16：30－16：50　A棟J421番教室）

特別講演（17：00－18：30　B棟J12番教室）

（司会）　東京大学教授　斎藤兆史

学校英語教育のこれからを考える――「国際共通語としての英語力向上のための5つの提言と具体的施策」の批判的検討をとおして見えてくるもの――

（講師）　慶應義塾大学教授　大津由紀雄

懇親会（18：45－20：45）

会場：慶應義塾日吉ファカルティラウンジ（TEL: 045-562-7882）

シンポジウム（12：30 − 15：00）

1. 英米文学部門シンポジウム（B棟J12番教室）

「冷戦期ナショナリズムの諸相」

（司会、講師）　青山学院大学教授　折　島　正　司
（講師）　日本女子大学学術研究員　鈴　木　英　明
（講師）　東洋大学専任講師　近　藤　康　裕
（ディスカッサント）　東京学芸大学教授　大　田　信　良

冷戦期ナショナリズムの諸相

第2次大戦後の冷戦期は、それまでのナショナリズムが冷戦体制のもとに姿を変える時期とも言えると思います。たとえばアメリカはイデオロギーなき自由国家というイデオロギーを標榜しつつ、海外に対してはある意味普遍のアメリカ文化なるものを輸出することになります。しかしこれは言ってみれば普遍という名のナショナリズムでもありましょう。対する英国は、ある意味英国らしさを考えて、むしろparticularな英国を打ち出していくことになる。こうしたナショナリズムの様々な相を検討することは、現在のリベラリズムの系譜を考えることにも繋がりうる有益な視点と考えます。シンポジウムではこのような視点について様々にご示唆をくださる講師をお招きして考える機会を持ちたいと願っております。

1950年代の文化論とナショナリズム ――労働者階級文化、文学、批評――

東洋大学専任講師　近　藤　康　裕

カルチュラル・スタディーズのはじまりとされる、Richard HoggartやRaymond Williams, E. P. Thompsonの50年代の仕事を、帝国の縮減と‘anthropological turn’の関係に位置づけたのはJed Estyの*A Shrinking Island*である。文学史的には50年代は労働者階級を描いた小説が多く書かれた時代として知られるが、上記の、のちにニューレフトと呼ばれる作家・批評家たちの仕事も、労働者階級文化に着目したものであった。同時代に強い影響力をもっていたF. R. Leavisは文化をauthenticityの観点から捉えたが、Estyが‘anthropological turn’と見做す一連の労働者階級を前景化させた文化論は、Leavis的な文化観を批判しつつも、authenticな労働者階級の、ひいてはnationの、アイデンティティを打ち出したものとしても読まれうる。

この間のイデオロギー的な問題を再検討するために、Hoggartの*The Uses of Literacy*と、それに批判的に応答したWilliamsの文章を精査することから議論を始め、30年代から戦中、そして戦後の労働党の大勝利と福祉国家体制の確立という流れのなかで、nationalなものと労働者階級、レフトの運動のつながりが持った意味を、ニューレフトとカルチュラル・スタディーズの誕生に結びつけられる重要な文章のいくつかを再検討しながら考えてみたい。

回帰する「ダヴォス討論：カッシーラー対ハイデガー」

日本女子大学学術研究員　鈴　木　英　明

1929年の春にスイスのダヴォスで行われたカッシーラーとハイデガーとの討論は、主にカント解釈をめぐるものでした。新カント派寄りのカッシーラーが、哲学に隣接する諸学問領域へと水平的に研

究を広げ「哲学的人間学」をめざしたのに対して、ハイデガーは、「各々の事象研究に先立って、その根底に横たわっている現存在の存在了解構造をいわば垂直的に切り開くという方向」(『ダヴォス討論』訳者解説)をとりました。こうした両者の対立は、その後の人文学の歴史においてさまざまに反復されているように思えます。

ナチス政権樹立後、カッシーラーは(イギリス、スウェーデンを経て)アメリカ合衆国に移住し、イェール大学とコロンビア大学で教鞭をとりました。この発表では、アメリカ冷戦期の批評の中心人物の一人である René Wellek の著作に、「ダヴォス討論」の反響を聴き取ってみたいと思います。ウェレックはカッシーラーと同様、ドイツ語圏からアメリカに移住した学者であり、その最初の著作は(「ダヴォス討論」の主要テーマであった)カントをめぐるもの *Immanuel Kant in England 1793-1838* (1931)でした。こうしたことを踏まえると、ウェレックの批評は、ハイデガーのナチス問題への態度も含めた「冷戦期ナショナリズムの諸相」を見るには格好のテクストなのかもしれません。

Robert Penn Warren の場合

青山学院大学教授　折　島　正　司

普遍的な他者の尊重の主張は、特定の共同体への愛(広い意味のナショナリズム)を介して自己への愛(利己、エゴイズム、自己の保全のための他者への暴力)に転換するものであるとする。

アメリカは、普遍国家のナショナリズムという矛盾、普遍的な価値の体現を(合衆国という国家や、一部のエスニックグループという)特定の共同体の特性として主張するという矛盾を抱えているとされる。外部に対しては、他国へのふるまいにおいて、内部に対しては異人種へのふるまいにおいて、この矛盾が他者への暴力という退廃形態として発現することがありうる。

Robert Penn Warren (1905-89) が39年に発表した小説 *Night Rider*、公民権運動のさなかに書いた *Segregation* (1956) や *The Legacy of the Civil War* (1961) を再訪し、他者の尊重／自己への愛という構造変換装置として、共同体への愛の働きを探ってみたい。

研究発表(15：15 − 16：15)

(司会)　東京大学教授　寺　澤　　盾

第1室(A棟J421番教室)

中英語ロマンスと年代記に映し出されるデーン人の表象

立教大学大学院　岡　本　広　毅

イングランドを舞台にした中英語ロマンス作品には、一見虚構として捉えられがちな物語の背後に、自国の歴史との関連性が指摘されている。アングロ・サクソン時代以降、とりわけデーン人の存在は、歴史記述だけでなくロマンスの中でも広く認識されていた。*Guy of Warwick* における Anlaf 王率いる Colbrond や *Horn Childe and Maiden Rimnild* の冒頭で言及されるデーン人の侵攻と襲来は、象徴的にもイングランドの国家存亡の危機を暗示し、主人公の武勇が試されると同時に国の行く末を賭けた重大な契機として記される。言い換えれば、中英語ロマンスに刻印されるこの異民族侵攻の歴史は、イングランドの国家意識の高揚を促す物語として考えることができる。こうしたロマンスの一側面は、島内の隣国に攻め入り、自国の防衛を強化したエドワード一世の時期の政治的、そして文化的背景との関連性からも更なる再検討が必要であろう。一方で、*King Horn*、*Havelok the Dane* に

は同時代の風潮に必ずしも与することのない、独自の冷静な反応が見て取れる。

本発表では、主に中英語ロマンスと年代記に映し出されるデーン人の表象を精査し、国威の発揚に対する地域的思想の多様性について検討する。中英語ロマンスを「他者の痕跡と自国の歴史の形成」という観点から見直すことで、中世イングランドにおけるナショナル・アイデンティティの諸相の一端を明らかにする。

（司会） 慶應義塾大学准教授 大 串 尚 代

第2室（A棟J422番教室）

言い直して、その先へ ——E・A・ポー「黒猫」(1843) におけるカテゴリー形成——

中央大学非常勤講師 須 藤 彩 子

私は、ポーの「黒猫」に登場する「猫」に語り手と読者がカテゴリー化を試みて失敗するプロセスを、細部の読みを提示しながら考察したい。

「黒猫」では、次々に小さい事件がおこる。語り手も読者も、現れる「猫」の行動と、そういう行動をする「猫」の正体を、その場、そのときで解釈しようと試みる。その解釈がいつか一貫性をもった「カテゴリー」に集約されることを願う。魔女、亡霊、復讐者、悪魔、ネコという四つ足の生き物、などに。

語り手は、「猫はAである」と宣言しようとしても、すぐに、「違うかもしれない」、「Bかもしれない」、「A_1かも」、と、自信なさそうに言い直してしまうのだが、立ち止まってしまうことはない。不安や恐怖に苛まれながらも、また一歩、日々の暮らしを進めていく。なぜそれが可能なのか。迷ってはいても、暫定的に「Aである」とすることはできるからだ。かりそめの結論であっても、妥当性はあり、行動の拠り所にできるのだ。次の事件が起きたときには、この暫定カテゴリーAを次の暫定カテゴリーA_2やCに変えればよい。

このプロセスは、認知言語学で言う「カテゴリー形成」と共通している。新しいモノであっても、とりあえず、あるカテゴリーのメンバーに迎え入れ、そのカテゴリーの共通性「スキーマ」を改訂し、その後の言語活動と日々の活動をしていく、という点でよく似ている。

だが、語り手は「怪物」相手にそれ以上行動できなくなり、絞首台に送られる。読者も、収束しない謎と語り手の退場に取り残されて立ちすくむ。同じ構造の詩「大鴉」や「赤死病の仮面劇」の結末と同様に、この作品の結末において言語活動は断ち切られてしまうのである。

（司会） 早稲田大学准教授 石 原 剛

第3室（A棟J423番教室）

エドワード朝期における少年冒険小説の（不）可能性
——『ピーター・パン』と自由帝国主義——

一橋大学大学院 高 田 英 和

ダニエル・デフォーの『ロビンソン・クルーソー』(1719) を中心に成立する物語の系譜、いわゆるロビンソネイドのそれは、たとえば、もはや古典とも言えるマーティン・グリーンの『ロビンソン・クルーソー物語』(1990) において、当時の帝国主義の密接な関連が明らかにされている。しかし、グ

リーンはこの本において、冒険する少年の主体形成と帝国植民地の拡張との関連に重点を置いて、その（非）人道的側面を示しているにすぎない。

グリーンの枠組みが世紀転換期以降に変容した可能性に着眼しながら、ケリー・ボイドは、『英国における男らしさと少年物語誌――文化史、1855年から1940年まで――』（2003）の中で、1890年から1920年までの少年雑誌において、それまで大いに評判の高かった帝国冒険物語が国内冒険物語に人気を奪われたこと、そして、その主人公が貴族的なものから庶民的な人物像へと変化したことを指摘している。本発表は、ボイドによるこの指摘を補助線にしながら、エドワード朝期におけるロビンソネイドの変容を考察する。

J・M・バリの『ピーター・パン』（1911）が徴候的に示す変化は、1）主人公の成長が疑問視されること、それと関連しながら、2）舞台が想像上の島Never Landに設定されることである。グリーンはこれをロビンソネイドの終焉、不可能性と位置づけようとするが、むしろわれわれは、ボイドの議論を補助線としながら、1）帝国主義批判の正論の登場のなかで、英国のリベラリズムが自由放任主義からニュー・リベラリズムへと転換すること、2）いわゆるメインストリームの小説において、リアリズムが終わり、モダニズムが新たなる価値として台頭することに関連付けたい。想像上にしか登場しない「島」が、ここではイギリス国内と連続的であることを確認しながら、『ピーター・パン』が、ボーア戦争を契機とするイギリス帝国主義の内向きへの変容、つまり、拡張から維持への転回と密接な関係にあることを明らかにしたい。

（司会）　東京大学准教授　田　尻　芳　樹

第４室（A棟J424番教室）

〝帝国〟と〝老い〟――J. M. クッツェーの *Waiting for the Barbarians*――

早稲田大学大学院　川　村　由　美

本発表では、南アフリカ出身の白人作家、J. M. クッツェー（b.1940）の第三作、*Waiting for the Barbarians*（1980、邦題『夷狄を待ちながら』、以下 *WB*）を取り上げ、〝帝国〟と〝老い〟の関係を論じる。

*WB*は、クッツェー自身が拷問の物語と称する作品である。初老の「私」が民政官を務める辺境の地に、帝国の首都から治安警察の大佐がやってきて、敵とみなした土着民をとらえては、真実を引き出すという名目で、拷問を繰り返すのである。この拷問/暴力は、帝国が生成する“物語（＝歴史）”の中で正当化されている。

クッツェー作品の底流には常に、どのように他者の身体の苦しみを知り得るか、さらには、自己が生成する物語によって他者をゆがめることなく、どのように他者に接近しうるかという問いがある。この問いからは、多様なトピックが照らし出されていく。その一つが〝老い〟である。*WB*においても、「私」は自らの老いに繰り返し言及している。では、なぜ「私」は老いていなければならないのだろうか。

この作品は、執筆当時（1970年代）の南ア政策との類似が指摘される一方、普遍的な抑圧と被抑圧の物語とも読み得ることも、論じられてきた。本発表では、その双方を考察しつつ、〝帝国〟と〝老い〟の関係を探求する。

特別講演（17：00 − 18：30　B棟J12番教室）

（司会）　東京大学教授　斎　藤　兆　史

学校英語教育のこれからを考える
――「国際共通語としての英語力向上のための5つの提言と具体的施策」の批判的検討をとおして見えてくるもの――

（講師）　慶應義塾大学教授　大　津　由紀雄

文部科学省が2010年11月に設置した「外国語能力の向上に関する検討会」（座長：吉田研作上智大学教授）が審議のまとめとして「国際共通語としての英語力向上のための5つの提言と具体的施策～英語を学ぶ意欲と使う機会の充実を通じた確かなコミュニケーション能力の育成に向けて～」（2011年7月13日）を公表しました。この報告書は今後の英語教育、とくに、学校英語教育に大きな影響を与えるものと考えられます。そこで、この報告書を批判的に検討し、その作業をとおして見えてくる学校英語教育の現状の問題点とそのあるべき姿について論じたいと思います。